館山市東田遺跡出土の粗造土器（上）と土製模造品（下）

安房の古墳時代祭祀
―館山市東田遺跡の事例―

城田義友・吉野健一

1．はじめに

東田遺跡は館山市上真倉字東田に所在し、館山平野の南端を流れる汐入川の中流域左岸の標高10m前後の河岸段丘上に立地する、縄文時代早期から中近世にかけての複合遺跡である。発掘調査は国道410号バイパスの建設に伴って平成８年度および平成９年度に実施された。調査対象面積4,700㎡、本調査面積は3,300㎡である。遺跡は以前から畑として利用されており、耕作に伴って多くの遺物が出土することが知られており、今回の調査でも縄文時代から中近世にわたって大きな成果が得られた。中でも中心となるのは、弥生時代後期から奈良時代にかけての遺構である。今回調査で検出された主な遺構を列挙すると、弥生時代後期～奈良時代の竪穴住居跡や溝跡、土坑、古墳時代後期の大規模な掘立柱建物跡、同じく古墳時代後期の水際祭祀遺構（水路跡）などがある。これらの中でも、古墳時代の遺構は、本遺跡を特徴付け、かつ、この地方の古墳時代を解明する上で重要な資料となりうるものであると考えられる。今回は、これらの中から水際祭祀遺構とその出土遺物について述べる。

なお、東田遺跡は今年の３月に調査が終了したばかりである。まだ整理作業にとりかかっていない状態であるため、今回の報告はあくまでも、調査の所見と、代表的な遺物の観察に基づいて行なっている。整理作業が行われた結果、今回とは違った見解が提示される可能性もあるということを申し添えておく。

2．東田遺跡と周辺の祭祀遺跡（第１図）

安房地区では、これまでも土製模造品を中心とする祭祀遺物を出土する古墳時代の祭祀遺跡がいくつか知られており、この地域の特色となっている。東田遺跡が位置する汐入川の流域にも、祭祀遺跡が分布している。館ノ前遺跡(4)、本館遺跡(5)、南台遺跡は(6)、東田遺跡よりさらに上流部の低地に位置する遺跡である。猿田遺跡(8)、東長田遺跡(9)は汐入川支流の上流部の丘陵上もしくは麓に位置する遺跡である。これらの遺跡からは、粗造土器[1]や土製模造品が出土している。沼つとるば遺跡(3)は、東田遺跡の西側の尾根を隔てた谷の支谷の斜面に位置し、粗造土器や鈴鏡形、鐸形、鈴釧形、勾玉形、有孔円盤、土玉といった土製模造品が数多く出土しており、よく知られているが、自然堆積層からの出土であるとされ、祭祀の対象や形態など、明らかにされていない点が多い（森谷1971）。これらの祭祀遺跡の多くは1960年代から70年代にかけて、神尾明正、森谷ひろみ両氏により調査・研究が行われ、より広く知られるようになった。

これらの遺跡に対し、館山湾に面した沖積地に位置する長須賀条里制遺跡(2)は、ここ数年の当センターの調査により、その性格が知られるようになった遺跡である。名前の通り、古代の条里制遺構も検出されているが、その他に古墳時代の水田跡や溜池跡、そして用水路とそれに伴う５世紀の水際祭祀遺構が検出された。東田遺跡より古い段階の祭祀遺構として注目される。

大寺山洞穴(11)は、近年、館山市教育委員会と千葉大学によって発掘調査が進められ、古墳時代の舟葬墓が出土して脚光を浴びた。古墳時代の安房地区の葬制を知る上で重要である。その他にも館山市内では、北下台洞穴(12)、鉈切洞穴といった洞穴遺跡が知られている。

また、４世紀まで遡る外洋に面した小滝涼源寺遺跡(13)、多くの伝承が残る安房坐神社(14)などが主要な遺跡としてあげられよう。

3．遺跡の概要と検出された遺構（第２図、第３図）

遺跡は、汐入川とその支流が合流している地点に位置している。両流路の間には南から伸びる尾根の先端が入り込んでおり、尾根の末端は岩盤を露出し、河川の合流点に向かってなだらかに消えてゆく。岩盤の上面は平坦になっており、現在は畑地や道路として利用している。東田遺跡はこの岩盤の両側に河川により形成された段丘上に位置している。今回の調査では、この尾根の先端を横切るように細長く調査区が設けられ、汐入川から３段の段丘面を経て岩盤上に達するまでの

第1図　東田遺跡とその周辺の遺跡（1/50,000）

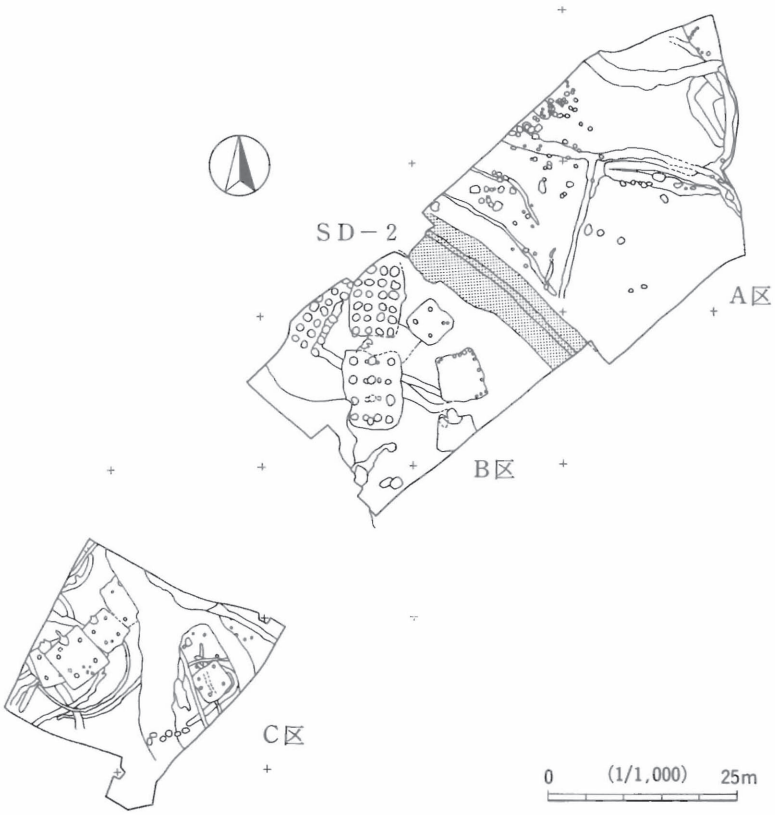
1．東田遺跡　2．長須賀条里制遺跡　3．沼つとるば遺跡　4．館ノ前遺跡　5．本館遺跡　6．南台遺跡
7．青山遺跡　8．猿田遺跡　9．東長田遺跡　10．袋畑遺跡　11．大寺山洞穴　12．北下洞穴　13．小滝涼源寺遺跡
14．安房坐神社　15．安房国分寺

第２図　東田遺跡と周辺の環境（1/5,000）
（薄い網掛け部分が遺跡の範囲。濃い網掛け部分が調査地点）

遺構の形成状況を捉えている。なお、支流側に広がる水田面には遺構が分布しないことが確認調査で判明しており、遺構は段丘上に限られることが推測される。

調査区内は、下位段丘面をＡ区、中位段丘面をＢ区、上位段丘面をＣ区として調査を行った。調査の結果、今回紹介するＳＤ－２は下位段丘面と中位段丘面との段差部分に位置していることが判明した。また、下位段丘面の中ほどには現地表面に比高差70cmほどの段差があり、そこからも古墳時代の溝状遺構が検出されている。遺跡の汐入川に面した部分は現在の川岸より比高差が1.5～２ｍの崖状となっており、河川の流れにより削り取られたものと考えられる。段丘崖に面したＡ区の北東端には、河川により削平された方形周溝墓や古墳時代の住居跡が検出されており、遺跡は現河道部にも広がっていたことがわかる。下位段丘面は海成砂層と考えられる粒子の細かい粘り気のある黄褐色砂質土の上面で遺構を確認した。この層は尾根先端の岩盤の裾まで、緩やかに傾斜しながら続く。Ｂ区の遺構検出面は黄褐色砂質土の上に堆積した川砂と考えられる無遺物層の上面である。そのことからＢ区で検出されている古墳時代後期の遺構が営まれたころには段差が存在していたのであろう。

Ｂ区で検出されている４棟の古墳時代後期掘立柱建物跡は、全て総柱式で、１棟は３間×５間、他は２間×３間、柱間は２間×３間のうち１棟が８尺等間、その他は全て５尺等間で、柱穴の規模は大きなもので直径１ｍほどもある。これらのうち、２棟には竪穴状の掘りこみを伴っている。２棟ずつで主軸を同一にし



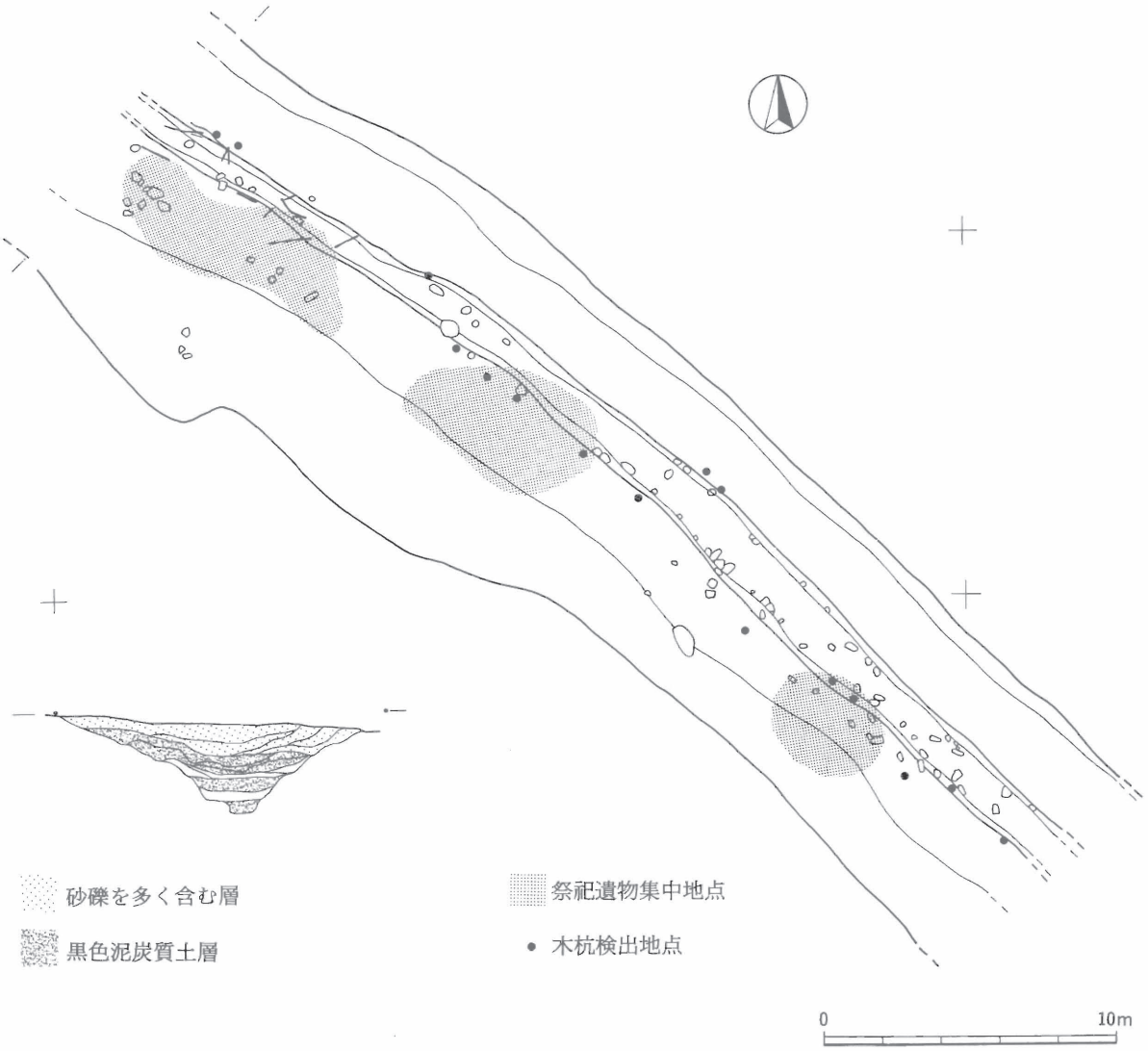
第３図　遺構配置図

て配置されており、少なくとも２期に分けられるが、新旧関係ははっきりしない。これらの他にも古墳時代の竪穴建物跡が４棟検出されている。これらの遺構上は、粘り気を持ち、乾燥するとコンクリートのように硬化する砂質土層が30cm～50cm堆積していた。またこの層は、多量の遺物を含んだ遺物包含層となっているのが大きな特徴といえる。この土層は河川堆積物に由来しているものと考えられ、汐入川の氾濫によりもたらされたものと推測されるが、この多量の遺物がどこから来たのか興味が持たれる。

上位段丘に位置するＣ区からも古墳時代後期の竪穴住居跡が検出されており、集落がここまで広がっていることが判明している。

４．祭祀遺構について（第３図、第４図）

ＳＤ－２は、Ａ区とＢ区の境界付近から調査区に直交するように検出された溝状遺構である。遺存部分の上端幅は広いところで５ｍ、下端幅0.5m、深さは深いところで1.8mないし２ｍ程にもなる。断面形は基本的にＶ字形だが両側面対称ではなく、北側斜面より南側斜面のほうがやや角度が緩い。底面は0.3mほどの深さで更に深く掘り下げられており、薬研状になっている。なお本遺構の西側部分では下部から岩盤が露出しているが、それをも掘りぬいており、不明瞭ながら工具の痕跡も認められた。床の両側面には30cmほどの大きさの岩が、およそ0.5m～１ｍ前後の間隔で並べられ、その外側には直径５cm程度の杭を打ち込んだような痕跡も残されている。また岩盤の露出している部分の最下層からは、比較的良好な状態で木質が多く出土しているが、すべて杭もしくは板材などであり、祭祀系遺物が見られないことから、当初この遺構は水路として掘削されたものであろう。覆土は大きく分けて上層～中層が暗褐色ないし黒褐色の粘質土層、下層がグライ化した粘土層もしくは均質なプリン状の泥炭層である。中層～下層にはいくつかの砂礫層を含んでいることから、少なくとも１回は再掘削を行ったものと推察される。なお遺構の構築地盤は汐入川の氾濫により堆積したと考えられる粗い砂地盤であるため、しまりが弱く流水などにより崩れやすい性質をもっている。埋没状況はおもに南側からの流れ込みによる自然堆積である。



第４図　Ｂ区ＳＤ－２溝状遺構概略図

５．出土遺物について

本遺構からは極めて多量の遺物が出土している。出土遺物は大半が古墳時代後期に比定される土師器である。杯、高杯、甕、壺など一般的な器種構成だが、この中では杯が顕著であり、甕や壺が比較的少なく、高杯は数えるほどしか見られない。このほか土製模造品や粗造土器も多く、巻上げ痕を明瞭に残し、手捏により整形された杯が非常に多く出土している。須恵器は少ないが、杯蓋と長頸瓶の優品が出土している。出土状況は上層から下層まで比較的散漫な状況を示すが、上層はやや少なく、中層がやや多い傾向を示している。また平面的には北側斜面より南側斜面に多くの土器がまとまっており、おおきく３つ程度のブロックに分かれるような様相が看取される。

まず杯は体部が内湾しながら立ちあがり、口唇部は直立するか、やや内向するタイプが中心となる。底部は丸みを帯びており安定しないものがほとんどであるが、中には小さな平坦面をつくりだすものもある。このほかわずかながら杯部がやや浅く、立ちあがりの高い杯蓋模倣杯が散見される。杯は胎土に砂粒を多く含みやや粗いものが多いが、杯蓋模倣杯は精製された良質の胎土である。前者には赤彩されるものと赤彩されないものとがある。いずれも焼成は比較的良好なものが多い。高杯は全体に占める割合が非常に小さい。いずれも形態的には脚部は、脚柱が背の高い円錐形、裾はラッパ状に広がるタイプで、杯部には非常に明瞭な稜を有し、外面全面が赤彩されている。胎土は比較的精製された良質な粘土で、焼成は良好である。甕は体部があまり膨らまず、ラグビーボール形を呈するものがほとんどである。胎土は砂粒や白色針状物質など混

入物を多く含みやや粗いが、焼成は比較的良好なものが多い。壺はすべて中型（器高20cm前後）と小型（器高10cm前後以下）のものに分けられる。いずれも体部が算盤玉状に強く張り、頸部が細くすぼまっている。口縁部は急角度で直線的に立ちあがる、いわゆる坩型と呼ばれる形態である。すべて外面全面と口縁部内面が赤彩されている。胎土は砂粒などを含むが比較的良質で、焼成も良好なものが多い。

6．祭祀遺物について

(1) 粗造土器（第5図）

粗造土器には渦を巻くようなナデもしくはヘラ状工具による成形が施されている例が多い。これらを表現する際、左回りあるいは右回りといった表現を用いるが、これは外面では底部方向から見た場合であり、内面では口縁部方向から見た場合を指す。混乱を招く恐れもあるが、土器を製作する過程を想定してこのように表記した[2)]。

1～14は杯である。1～9は底部に木葉痕が残されている個体である。

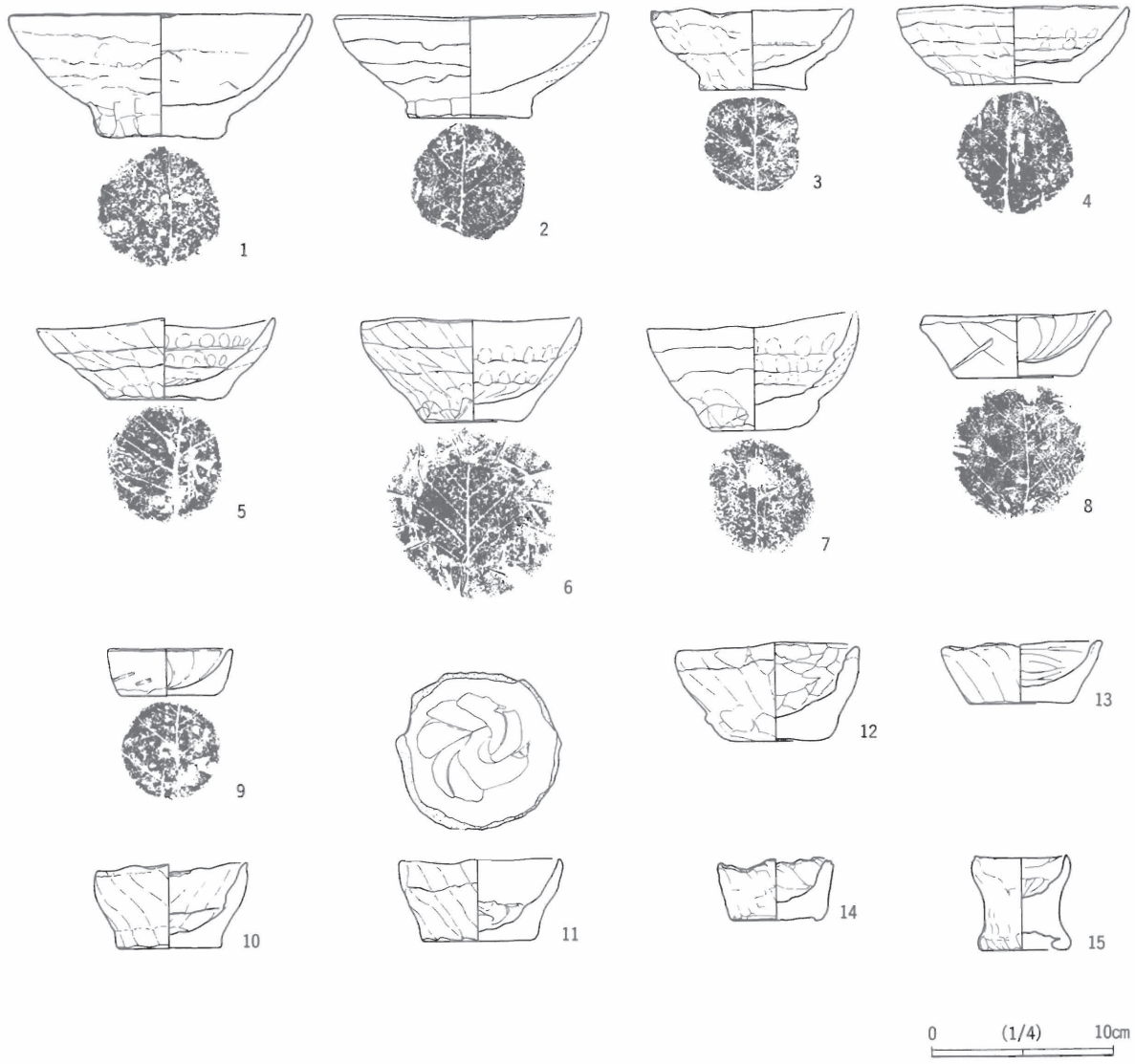
1～3は高台状の脚部を持つ個体である。1、2は口縁部上端をヘラ状工具で丁寧に作出しており、外面、内面とも丁寧にナデ調整され、調整痕はほとんど確認できない。脚部には若干のヘラ状工具による成形痕が見られる。外面には輪積み痕を明瞭に残すが、内面ではほとんど消されている。底部には木葉痕が見られる。3は外面の調整が指ナデにより行われている個体で、器面に指紋が残る。脚部をヘラ状の工具で成形してから、底部から口縁部に向かって左回りに指ナデが施される。口縁部上端の凹凸が激しく、断面は鋭く尖る。外面、内面とも輪積み痕を残すが、内面のものはかなり意図的である。底部に木葉痕が残る。

4、5は内面外面とも輪積み痕を明瞭に残し、脚の形成が不明瞭な個体である。4は、外面が指ナデにより底部から口縁部方向にかけて左回りに調整されており、さらに底部付近は、もう一度押さえつけるようにしている。口縁部上端は横方向に指ナデを施している。内面は、輪積み痕の下端をほぼ等間隔に指頭（あるいはヘラ状工具）で押さえつけ、その上から底部から口縁部に向けて左回りに指ナデを施している。指頭痕は意図的に残されているものと見られる。底部内面は、細いヘラ状工具で中央から放射状に成形した後、指により同一方向に調整が行われており、工具の痕が明瞭に残されている。胎土は1～3と同様に直径1㎜程度の砂粒を含むが、肌理は細かく焼成も良好で、明灰色である。5も4とほぼ同様に製作されているが、より歪みが激しい個体である。外面の調整は指により体部→口縁部の順に2段階にナデが施されているのが観察される。内面はやはり指頭痕が等間隔に見られるが、その後に横方向のナデが施されている。底部内面の処理は4よりも不明瞭だが、同様の方法で行われているものと思われる。胎土は直径0.5㎜～1㎜程度の砂粒を多く含むが、肌理は細かく焼成は良好で、明褐色である。いずれも底部に木葉痕を残している。

6、7は器壁がより急角度に立ちあがり、やや内湾する器形で、杯というよりも椀といった形状をしている。粘土紐の巻き上げにより作られている。6は、外面を指により5と同様に2段階の調整を行っている。底部付近には製作時に土器を乗せておいた木の葉を体部側まで折り曲げておいた痕跡が明瞭に残っており、外面の調整の終了後に取り外したことが窺える。内面は巻き上げ痕が明瞭に残り、等間隔に押圧痕が施されている。押圧は指頭ではなくヘラ状工具で施されているもの考えられる。底面は指頭により放射状に調整されているものと考えられる。内面は黒色処理を施している。胎土には直径0.2㎜程の砂粒が含まれるが、緻密で、焼成は良好である。7も同様の器形だが、巻き上げ痕がより鮮明に観察できる。外面の調整痕は不鮮明だが、底部付近の括れ部分には、指頭圧痕が見られる。6と同様に体部にまで木葉痕が及ぶことから、木葉が付いたまま指で押圧したものと見られる。内面には巻き上げ痕が明確に現れており、粘土紐の下部に等間隔に施された押圧痕が認められる。押圧に用いた工具などは圧痕が不鮮明なため推測出来ない。底部から口縁部に向かって左回りにナデが施されている。底面にはヘラ状工具によるやや左巻きの放射状調整痕が観察される。

8は、器高が低くわずかに器壁が外反する個体である。口唇部は横ナデが施されているが、上端は極めて雑なままとなっている。内面はヘラ状工具により中心から放射状に左回りに渦を巻くように調整されている。6、7と同様に底部を木葉で包んで形成し、葉を外した後に外面にケズリを施したものと見られ、葉柄の圧痕が図に示したように残っている。

9も器高が低い個体で、ほとんど変化せずに器壁が立ち上がる。外面は横方向のナデ調整が施されているが、凹凸が見られ雑である。内面は、底面中央から左巻きの渦巻き状にヘラ状工具による調整が行われてい



第５図　粗造土器

る。

10～14は、底部に木葉痕が見られないタイプである。

10、11は、底部付近が台状に括れ、口径が相対的に狭いタイプである。底部は水平に成形され、安定がよく、縁辺の稜が明確に作出されている。10は、外面の輪積み痕はほとんど消失し、内面にのみ残されているタイプである。外面は不明瞭ながら底部から口縁部に向かって左回りのナデが施されており、その後底部付近を指で押さえつけている。内面は、底部内面については、指により放射状にナデが施されているが、規則的ではなく雑である。口縁部付近は、下から口縁部に向かって指で押さえつけて成形しており、その後横ナデが施されている。胎土は、１㎜弱の砂粒が含まれており、焼成は良好である。

11は、外面は不明瞭ながら輪積み痕を残し、底部付近から口縁部に向かって左回りに指ナデを施している。内面は底部内面を中心から左回りで渦巻き状にヘラ状工具により掻き出すような調整が施されている。口縁部付近は、横ナデである。胎土は約１㎜弱の砂粒を含み、焼成は良好である。

12は、底部縁辺が丸みを帯びる点など、器形的には６、７に類似するが、口縁部上端が丸みを帯び、調整が雑な点など、相違点も見られる。外面は底部から口縁部み向けて左回りに指ナデを施しており、その後に底部付近の調整を行っている。底部内面については放射状を意識し、口縁部付近内面については横方向を意識してヘラ状工具で成形および調整を行っているが、作業が乱雑である。胎土は砂粒が少なく、緻密で、焼成も良好である。

13、14は、器形的に８、９と共通した特徴を持つ個

体である。底部は平坦に作られ、縁辺の稜もしっかりしている。13は外面が底部から口縁部に向かって左回りに指ナデが施されている。底部内面はヘラ状工具で一定方向に調整され、体部内面は横ナデが施されている。14は、小型の個体で、指によって成形した後でヘラケズリによって調整されている。底部は器面が荒れて、凹凸が見られるが本来は水平に成形されたものと考えられる。内面はヘラ状工具により左巻きの渦巻き状に成形されており、それが口縁部まで及ぶ。13、14とも胎土は直径約1㎜前後の砂粒を含み、緻密で、焼成は良好である。

15は、高杯あるいは器台形の粗造土器、もしくは臼形の土製模造品である。粘土塊から体部と脚部を手捏により形成し、平坦な面に脚部を押しつけて潰すようにしている。体部の外面は、脚部から口縁部に向けて左巻きに指ナデが施されている。内面は杯の多くと同じように、底面をヘラ状工具により放射状に調整し、口縁部付近は横方向にヘラナデが施されている。胎土は約1㎜前後の砂粒を含み、緻密で、焼成は良好である。

以上、祭祀に伴うものと考えられるいわゆる粗造土器について、概略を述べた。ここではこれらの土師器を粗造土器として紹介したが、これまでも述べてきたように、粗雑に形成されているわけではなく、ヘラ状工具などを用いて、複雑な工程を経ていることがわかる。1～7に見られるように、あえて輪積み痕を残し、内面には、粘土紐を指または工具により押さえつけたような痕跡を付け、木葉痕を消さないなど、意図的に粗雑な姿に仕上げていることが強く窺える。

今回は、杯と高杯（あるいは器台）を大きく6タイプに分類して紹介したが、輪積み痕（あるいは巻き上げ痕）を残すことや、外面の調整方法や、内面の渦巻き状の成形痕といったような、各タイプ間に跨るような工法・意匠が見られ、興味深い。これらの意匠の有無や、器形の差異といったものが、ある一つの祭祀の中で異なった意味や役割を持つものなのか、あるいは時間差によるものなのかは、今後の整理作業の成果を待つところである。

(2) 土製模造品（第6図、第7図、第8図）

今回の調査において、数多くの土製模造品が出土している。量的には土玉が多く、管玉、土製円板がそれに次ぐものと思われる。特徴的な遺物として、剣形品や精製の鏡形、鈴鏡形、鋤先形などが見られるがこれらの中では、剣形が比較的多い。

1）鏡形（1～5）

1～5は明確に鏡を模したものと考えられる。1は紐を貼り付けで表現した極めて写実的な個体である。表面はナデによって丁寧に仕上げられている。胎土には粗造土器と同様に直径約0.5㎜ほどの砂粒を含み、粘土の肌理は細かく、焼成は良好である。色調は明褐色である。2は四鈴鏡を模したものと考えられる。鈕は写実的ではなく、中央に穴を一つ開けることによって表現されているのに対し、鈴は粘土塊を貼り付けて表現されている。胎土の砂粒は1よりも多く、やや肌理が荒い。焼成は良好である。色調は灰褐色である。3も四鈴鏡であると考えられる。2と比較すると表現に具体性を欠く。鈕は中央の穴により表現され、鈴は体部から指で摘んで引き出すようにして作出している。胎土は砂粒が少なく、肌理は細かいが、表面が溶けたような風合いがあり、やや焼きが甘いような印象を受ける。4、5は円盤状にした粘土から鈕を指でつまみ出して形成したタイプである。鈕には穴が開けられている。鈕を観察すると、表面は丁寧に調整されてはおらず、粘土がめくれているのが観察できる。胎土には砂粒を含み、焼成は普通である。色調は褐色である。

6は、円盤状の粘土塊から突起を指で摘み上げて形成されている土製品で、40%ほどが欠損している。1～5と比較すると、技法に相違が見られることから、積極的に鏡形とは断じがたいが、類似資料として報告しておく。胎土には砂粒はほとんど含まれず、肌理は細かいが、焼成は甘い。明褐色である。

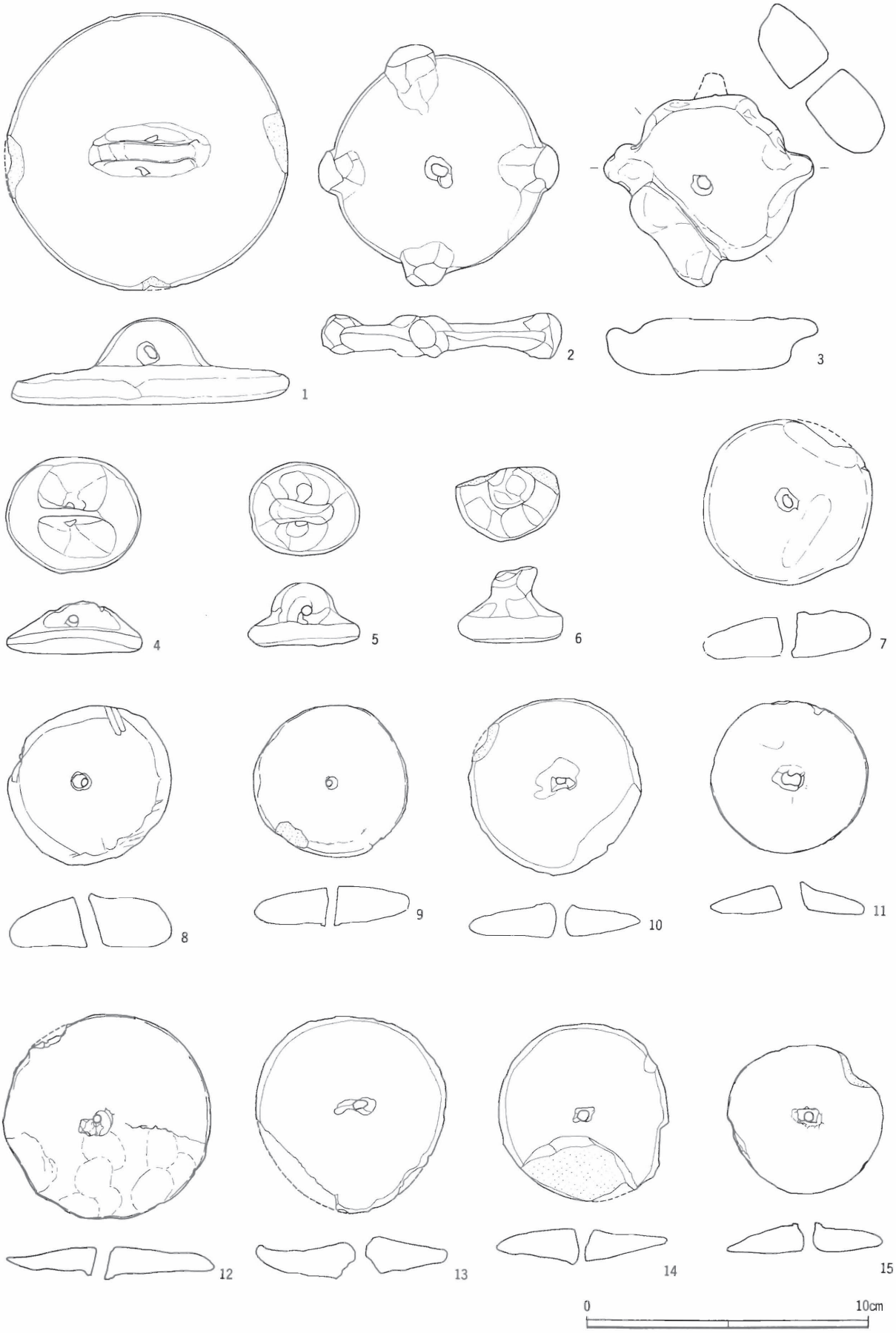
2）有孔円盤（7～26）

7～26は、いわゆる有孔円盤である。2、3のように、明らかに鈴鏡を模した例でも、鈕の表現が、中央に穿孔しただけのものが見られることから、鏡形である可能性が大きい。7～10、16～19のように端部断面が尖らず、丸みを帯びるものと、10～15のように端部断面が尖るものがある。鏡以外にも紡錘車である可能性も否定出来ないことから、このような形態の差が、鏡と紡錘車を分けている可能性もあり、注目される。

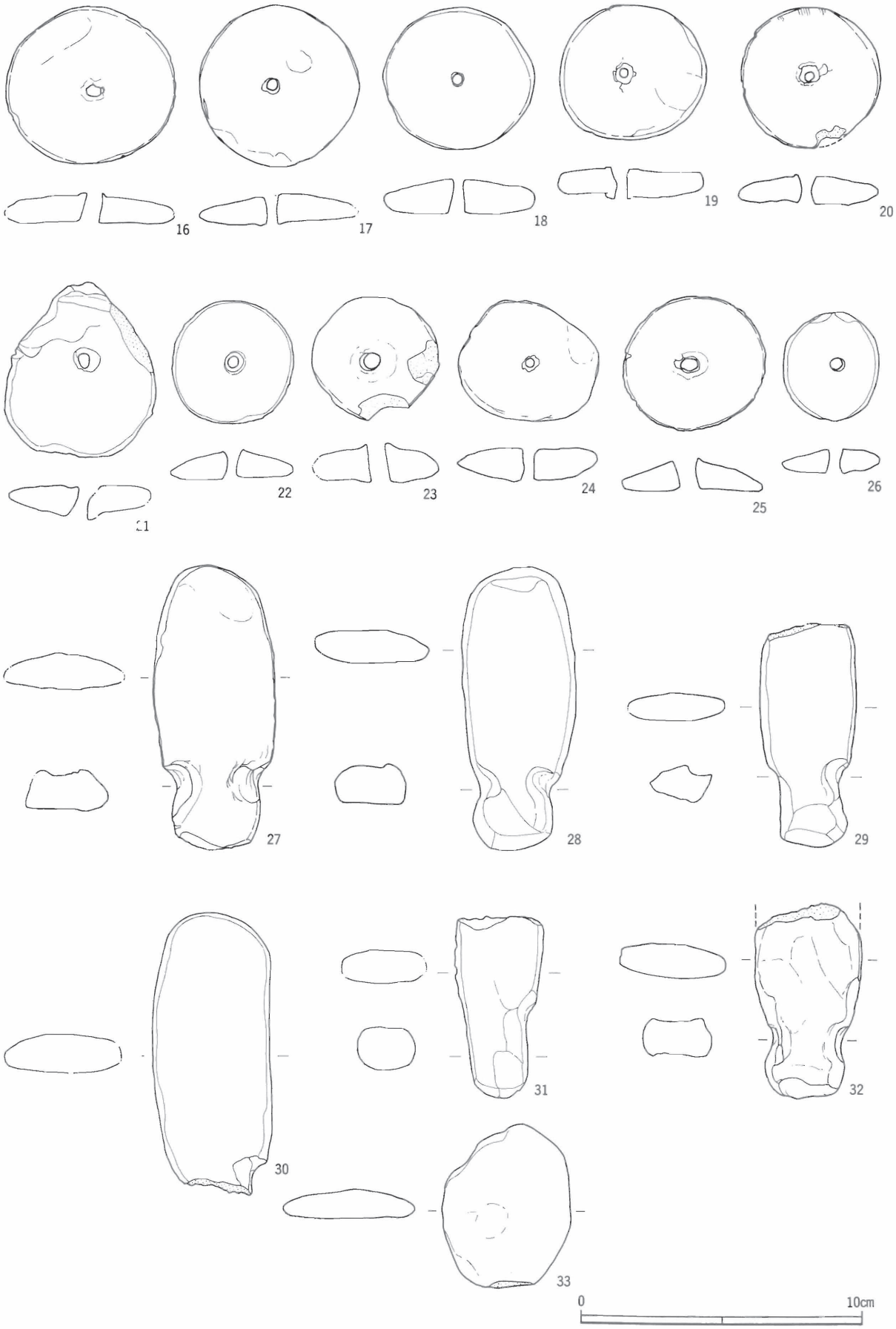
3）剣形（27～33）

やや偏平な粘土棒を用いて作られている。柄部は、粘土棒の一方の端を両側面から指で摘んで成形し、刃部も指で偏平に押し広げられている。調整も指で行われており、指紋が観察できる。

27、28は完形品である。柄部は、両者とも図で正面



第６図　土製模造品（鏡形、土製円盤）



第７図　土製模造品（土製円盤、剣形）

に示した方から指で摘んで引き出すように成形しており、刃部よりやや厚みがある。27は刃部先端が欠損した個体である。柄部は正面から摘んで左回りに捻って成形しており、柄頭の断面は円形である。30は、柄部が欠損している個体である。31、32は刃部が中央から欠損している個体である。31は柄部が括れたようにはならず、指でこねて棒状に成形しているものと考えられる。32は、両側から摘んだだけで柄部を成形しており、表面、裏面の両方に粘土がはみ出している。刃部両端がやや丸みを帯びている。

33は、偏平で楕円形を帯びている。柄部が欠損した剣形品であると考えられるが、あるいは他のものを模した遺物かもしれない。

4）勾玉形（34～38）

いずれも、長さ5cm程度の粘土紐を、指で曲げて造られていると見られる。

34は、腹部に粘土紐を曲げたときに付いた皺がある。側面、背面には成形された時に付いた指頭圧痕が見られ、所々にヘラ状工具によるものと思われる傷が確認でき、完全な手捏ではないことを示唆している。35は腹部と背面に皺が見られる。ヘラ状工具で削られた痕跡や、傷が見られ、やはり工具による細工が若干加えられていることが確認できる。34、35ともに胎土に砂粒を含み、表面の調整は雑だが、焼成は良好である。明灰色である。

36は、頭部が両側から押さえつけたように偏平である。表面は成形時の指頭圧痕が見られるが、焼成が甘いために溶けかかっており、滑らかになっている。尾部は切り落とされたような形状をしているが、折れ口が磨耗しているためにそう見えるのかもしれない。37も同様に、小さいのは焼成後の磨耗のためである可能性がある。38は、明らかに折れて頭部が欠損した個体である。やはり、折れ口は磨耗している。36～38は、胎土に砂は殆ど含まず、焼成が甘く、明褐色である。36には黒斑が見られる。

5）管玉形（39～47）

板状の粘土を棒に巻き付けて指で成形している。39～42のように長いものと、43～47のようにやや寸詰まりのものがある。小口面は切り落とされたように成形されているものが多く、石製の管玉の形状を模倣しようとしているものと考えられる。44のように両端とも丁寧に擦切状に成形されているものもあれば、41のように片側が、未成形のままのものもある。胎土に砂粒を含むものと、殆ど含まないものがあるが、焼成が良いものは少ない。

6）土玉（48～60）

48のように大型のものから、60のような小型のものまで存在する。

48は、際立って大型の個体である。指とヘラ状工具で雑に成形されており、かなりいびつである。小口面は未調整のままである。胎土に砂粒を含み、焼成は良好である。49は表面を丁寧にナデ調整された個体で、胎土にも砂粒などが含まれない。小口面は未調整のままで、棒を刺して上方から引き抜いた痕跡がわずかに見られる。50も同様に丁寧に造られ、小口面が未調整の個体だが、胎土に砂粒が含まれる。51は、縦方向に押しつぶされたような形状で、小口には稜が形成されている。しかし形状はいびつで、調整も雑である。砂粒を含み、焼成は良好である。52～60は、小型のもので、いずれも表面は、丁寧にナデ調整されている。54に若干の砂粒が含まれる以外は、混入物は少なく、胎土の肌理も細かい。54、55、56、60は、小口面がナデにより平坦に調整されており、不明瞭ながら稜が作出されている。

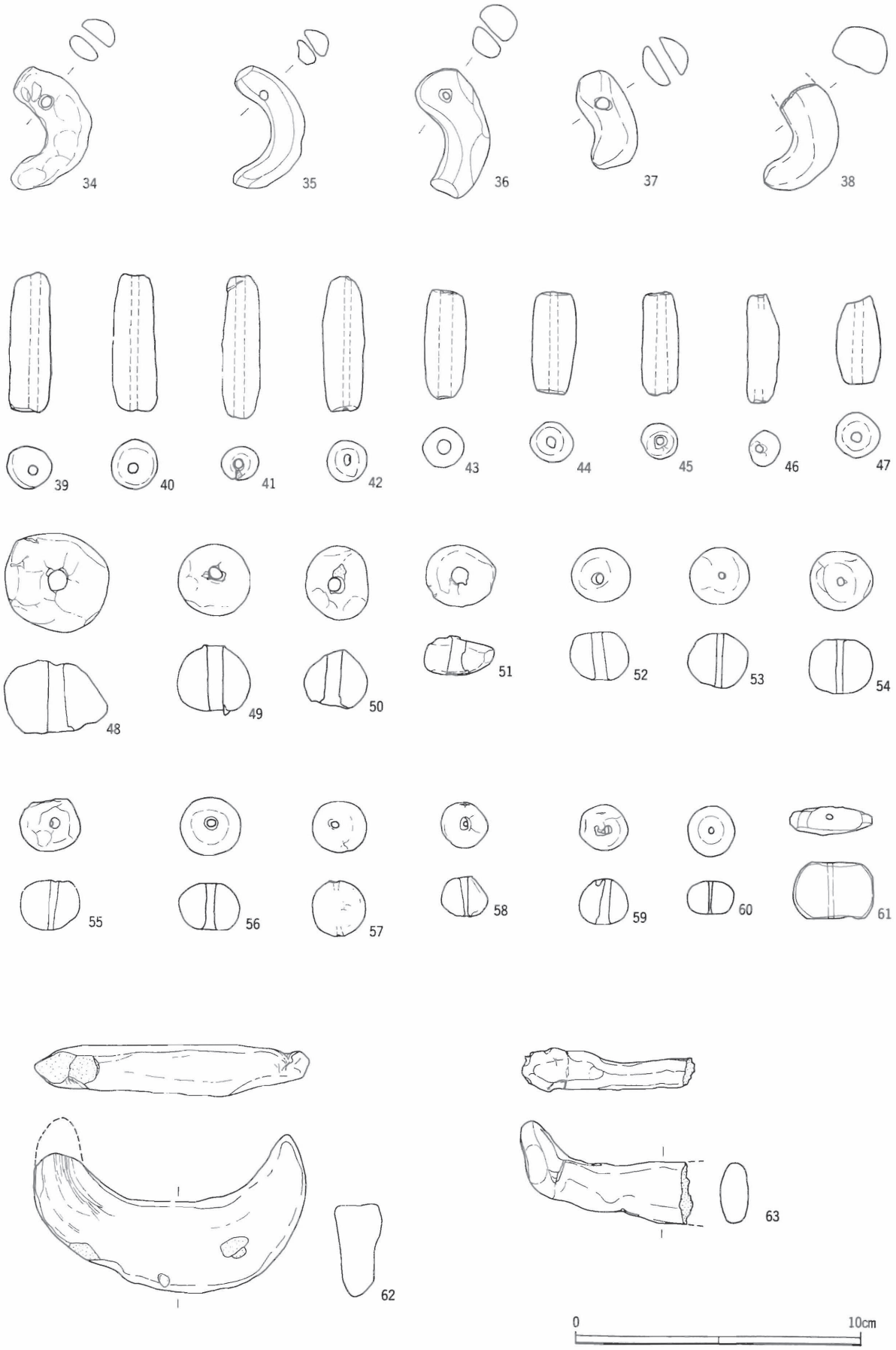
7）不明土製品（61）

61は、性格が不明の土製品である。両側面には粘土塊を押しつぶした時に出来たと見られる小さな亀裂が見られる。小型の土玉を押しつぶして形成したような印象を受ける。辺を形成する稜は明瞭で、小口面は切り落とされたようにしっかりしている。表面は、一方は湾曲しており、指ナデにより丁寧に調整されているが、もう一方は、藁や砂などが落ちているような所に置かれたような凹凸が見られ、未調整である。胎土には砂粒を含み、焼成は良好である。

8）鋤先形（62、63）

62は、一方の端部が欠損した個体である。刃部をやや鋭くし、上部に凹みを作出しており、両端は指で摘んで絞るようにしながら上方に引き上げて成形している。成形の痕跡を残したまま表面を丁寧に指ナデを施している。胎土には砂粒を少し含むが肌理は細かく、焼成はやや甘い。淡褐色である。

63は、およそ半分が欠損している個体である。粘土棒の尖らせた端部を上方に指で折り曲げて形成してお



第８図　土製模造品（勾玉形、管玉形、土玉、鋤先形）

り、刃部は指でこねて薄くしている。凹み状の表現は、折り曲げた部分に僅かに見られる程度であり、全体の表現としては、62と比較すると、極めて雑な印象を受ける。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良好である。くすんだ褐色である。

7．まとめ

これまで、東田遺跡出土の祭祀遺物について概観してきた。これらの祭祀遺物は、汐入川流域に分布する、沼つとるば遺跡、東長田遺跡、館ノ前遺跡などで出土している粗造土器、土製模造品と極めて類似しており、この地域に見られる特徴であると考えられる。その一方で、各遺跡で全く同じ遺物の組成をもつわけではないことが指摘できる。たとえば、同じくまとまった遺物量が出土している沼つとるば遺跡と比較すると、次のようになる。①沼つとるば遺跡には鐸形品が3点出土しているのに対し、東田遺跡では全く出土していない。②沼つとるば遺跡の鈴鏡形品には写実的な紐を持つ例があるのに対し、東田遺跡のものにはない（中央に穿孔するもののみ）。③東田遺跡からは剣形品が比較的多く出土しているのに対し、沼つとるば遺跡からは、柄部に穿孔が施されている例が出土しているのみである[3]。④粗造土器の形態に若干の相違が見られる。

このような差異は、祭祀を司る集団の個性なのか、あるいは祭祀形態（あるいは対象）の差によるものなのか、時期差によるものなのかは現在のところ不明である。

また、今回の東田遺跡の調査成果で最も注目される点は、祭祀遺物が遺構を伴って出土したことである。これまでこの地域の出土例が、山裾や斜面の遺物包含層からの出土が主であり、二次堆積遺物であると指摘されている例も少なくないことから、このような独自の祭祀の形態が全く明らかにされていなかった。これを機会に今後の研究の方向性が導き出せるのではないかと思う。

今回は、祭祀遺物のみの報告となったが、住居跡や掘立柱建物跡と溝状遺構の関連など、整理作業を通して解明すべき点が多く、今後の成果が期待される。

最後に本稿をまとめるにあたり、財団法人総南文化財センターの杉江隆氏に多くのご教示を得た。記してお礼申し上げたい。

註

1）輪積み痕や底部の木葉痕を意図的に残し、あえて粗雑に製作した土師器について便宜的に「粗造土器」の言葉を用いた。森谷ひろみ氏が沼つとるば遺跡出土の同様の土師器を「巻上げ粗造土器」と呼んでおり、そこから引用した（森谷1971）。「巻上げ」の文字を外したのは、粗雑なつくりの祭祀用土師器全体を示すためである。

2）左手に土器を持ち、右手で成形・調整を行った場合、外面に施す場合は底部が、内面に施す場合は口縁部がそれぞれ正面になることを想定している。

3）扁平で先端部がやや幅広くなる長方形の土製品で、鐸形品の舌であるとも考えられる。

文献

森谷ひろみ　1966　祭祀対象不明の祭祀遺跡とその沖積地質について－館山市東長田および大戸館ノ前の場合－　千葉大学文理学部紀要　第4号

森谷ひろみ　1971　千葉県館山市沼つとるば祭祀遺跡の発掘結果からみた遺跡付近の小地誌　千葉大学教養部研究報告　B－4

神尾明正　1976　古代祭祀遺跡にみられる安房国の地域性　千葉大学教養部研究報告　B－9